ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.10 October 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

10

CONTENTS

・巻頭言
ナイーブな本質主義としての護教論
／井上　昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」（9）
明治 20 年 12 月～明治 21 年 2 月
／深谷　耕治 2

・ライシテと天理教のフランス布教（33）
21 世紀のライシテと天理教のフランス布教 ③
／藤原　理人 3

・音のちから―中国古代の人と音楽（16）
出土楽器が語る音の世界―笙―
／中　純子 4

・ヴァチカン便り（64）
新たに 21 人の枢機卿が誕生
／山口　英雄 5

・思案・試案・私案
「碍」の字表記問題再考（27）
仏教にみる障害者像
／八木　三郎 6

・2023 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（9）
第 3 講：122「理さえあるならば」
／金子　昭 7

・おやさと研究所ニュース 8

第 359 回研究報告会「原典解読における実証的方法論及びその適用についての試論―『おふでさき』第 3 号をめぐって―」（7 月 31 日）／第 5 回東アジア宗教学会年次大会に参加・発表／ 2023 年度公開教学講座のご案内／ 2022 年度「教学と現代」

巻頭言

ナイーブな本質主義としての護教論

おやさと研究所長　井上昭洋　*Akihiro Inoue*

欧米の文化人類学では 1980 年代に「伝統の発明」論が唱えられた。これは、遠い昔から引き継がれてきたと思われる伝統の中にも、つい最近「発明」されたものがあるとする考え方である。例えば、正月に神社や寺院を参拝する「初詣」は、その名称も含め、明治 5 年の新橋－横浜間の鉄道開通にともない寺社と鉄道会社のタイアップにより創り出された風習だという。「初詣」程度であれば、寺社と鉄道会社の都合で創られた“新しい”伝統であると指摘されたところで、目からウロコの話で済むかもしれない。しかし、この「伝統の発明」論が切り開いた構築主義のパラダイムは、人類学者とネイティブとの間でしばしば軋轢を生み出すことになった。

しっかりと実在していると考えられているもの（子供）、不変の本質を有していると信じられているもの（日本人）が、実のところ社会的に構築されたものであると捉えるのが構築主義である。一方、伝統や集団には本質的で不変の部分があると捉えるのが本質主義である。確かに、小学校の校庭では子供たちが遊んでいるし、私もお隣さんも日本人であるから、「子供」も「日本人」も不変の本質を持って客観的に実在すると考えるわけである。当然のことながら、構築主義と本質主義は物事についての相対する見方であり、本来は互いに相容れない。

私の専門とするオセアニアの文化人類学的研究においては、1980 年代末から 1990 年代にかけて「伝統の発明」論を巡って人類学者とネイティブ（ハワイ人）の知識人との間で白熱した議論が交わされた。人類学者が、先住ハワイ人の「アロハ・アーイナ（土地への愛）」という伝統的価値観について、それは外来文化と接触していくなかで構築されたものであると指摘したのに対し、ネイティブの知識人は、白人は私たちの伝統がどのようなものであるかを決定する権利を私たちから奪い取っていると反論したのである。その時に彼らが採用したのが、西洋の歴史学とは異なるネイティブの系譜学（genealogy）を前面に押し立てた「戦略的な」本質主義であった。ネイティブの伝統には不変の本質的な部分があり、それを知っているのはネイティブの知の体系を身に付けたネイティブだけというわけだ。

「ネイティブのことが本当に分かるのはネイティブだけである」とただ単に主張するのなら、それはナイーブな本質主義であり、構築主義の脱構築的視線から逃れることはできない。彼らの本質主義が戦略的と見なされるのは、ネイティブには西洋とは異なる独自の知の体系（オーラル・トラディションに基づく系譜学）があることを意図的に主張したからである。それは、先住民の「大切なもの」を解体しようとする人類学者の構築主義に対する抵抗として、有効な戦略ではあった。

ところで、「ネイティブのことが分かるのはネイティブだけ」という語りと似たような語りは、教内で時になされることがあった。1990 年代、井上昭夫が教外の研究者を巻き込んで「元の理」研究を展開していた時、「元の理が本当に分かるのは天理教の信仰者だけだ」と教外研究者に元の理を解釈させることを訝る声が聞こえてきたようだ。一信者がそのように語るのであれば、自らの信仰が研究の対象になることを拒む純粋な信仰者の護教論的態度として分からなくもない。しかし、教学者が同様の主張をするのであれば、ナイーブな本質主義者のままでいることは許されないだろう。ナイーブな本質主義によって護教論を論じ、教外研究者の批評から自らの宗教を護っているかのごとく振る舞うようでは天理教学の進展は見込めないと思う。